令和 6 年度厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）
分担研究報告書

1. 管理栄養士養成施設の大学入試制度に関する実態調査

研究分担者　奈良　一寛　実践女子大学生活科学部
研究分担者　鈴木　拓史　同志社女子大学生活科学部

研究要旨

令和 7 年度大学入学者選抜では、多くの大学で多様な選抜方式（一般選抜、総合型選抜および学校推薦型選抜）が導入されている。近年、総合型選抜による入学者の割合が増加傾向にある中、管理栄養士養成大学における入学者選抜の動向については明らかではない。本研究では、管理栄養士養成大学における入学者選抜の実態について調査した。

総合型選抜は、国公立大学（1 大学あたりの平均試験回数 1.0 回/年）に比べ私立大学（1 大学あたりの平均試験回数 1.8 回/年）で多く行われていた。主な選考要素は、書類審査と面接であり、さらに小論文やプレゼンテーションを課す大学も見られた。学校推薦型選抜は国公立大学（1 大学あたりの平均試験回数 1.5 回/年）に比べ、私立大学（1 大学あたりの平均試験回数 1.8 回/年）で多く行われていた。主な選考要素は、書類審査と面接、小論文や基礎学力試験など多岐にわたっていた。一般選抜については、国公立大学では、大学入学共通テスト（共通テスト）で理科の選択が必須となっているのに対し、大学独自の問題で行う一般個別方式と共通テストを利用する方式が主な受験方法である私立大学では、2 教科型および 3 教科型で理科の科目を課す場合が多く、特に 3 教科型では理科の科目を必須とする試験の割合が高かった。

管理栄養士養成大学として掲げているアドミッションポリシーをテキストマイニング解析した結果、多くの大学が健康社会の実現のために貢献できる管理栄養士養成を目指していることがわかった。また、管理栄養士を養成するためには、食や栄養に関する知識を、医療・介護・福祉を始めとする様々な領域で生かせる能力の涵養が重要であり、そのための基礎学力として、理科の科目である化学と生物の知識の習得が重要であると考えられた。

一般選抜については理科の科目を課す大学がほとんどであったのに対し、総合選抜型については理科の科目を課す大学は一部であった。近年、多くの私立大学では、総合型選抜や学校推薦型選抜などの年内入試で早期に入学者を確保する動きが見られることを踏まえると、理科の科目を受験科目として選択せずに入学する学生が今後増加していく可能性が考えられた。

A.　背景と目的

令和 7 年度大学入学者選抜実施要項[1)] によると、大学入学者選抜は、各大学がその教育理念とアドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）に基づき実施され、高等学校の段階で培った力を大学で発展・向上させることを目的として、学力を構成する 3 要素（①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③主体性を持ち、多様

な人々と協働しつつ学習する態度）が重視され、多面的・総合的に入学者を評価・判定するものであるとされている。入試方法としては、主に、一般選抜、総合型選抜および学校推薦型選抜の3つがあり[1]、大学入試は多様な観点から志願者を評価する仕組みとなっている。

文部科学省の令和 6 年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要[2]によると、国公私立大学への入学者数は約 61.3 万人で、そのうちの約 29.1 万人が一般選抜による入学者であり、これは入学者の 47.5%に相当する。また、学校推薦型選抜は入学者の約 35.0%、総合型選抜（旧 AO 入試）が 16.1%を占め、総合型選抜と学校推薦型選抜を合わせた年内入試の割合が多くなってきている。

入試方法に加え、試験期日もいくつも設定され、ますます複雑になる大学入試ではあるが、管理栄養士養成大学の入学者選抜の実態については十分に把握されていない。そこで本分担研究では、管理栄養士養成大学を対象とし、国公立・私立の別および入試制度の別に、入学者選抜の実態について、特に、入試科目として理科の科目を課しているかどうかに焦点を当てて調査した。

B. 方法

B-1. 管理栄養士養成大学における入試情報

国内の管理栄養士養成大学である国公立大学 23 大学、私立大学 122 大学のうち募集停止の 2 大学を除く合計 143 大学を調査対象とし、データ提供を依頼した株式会社 O から提供された令和 7（2025）年度大学入学者選抜に関する公開情報を利用した。株式会社 O の総合型選抜および学校推薦型選抜の入試情報は、各大学への Web アンケートと郵送アンケートに基づく情報であり、また、一般選抜の入試情報は、入試ガイド・パンフレット・募集要項等の大学資料をもとに収集されたデータである。いずれも株式会社 O の Web ページや出版物に公表されている情報とし、それらを集計および解析した。

B-2. テキストマイニングを用いたアドミッションポリシーの解析

管理栄養士養成大学 145 大学を対象として、Web 上に公開されているアドミッションポリシーを抽出し、全文字列をフリーテキストマイニングツール（ユーザーローカル AI テキストマイニング）による分析を実施した。解析に際して、「できる、栄養学科、学校法人、身、付ける、つける、有す、高等学校、持つなど」の解析において意味をなさない単語は予め除外した。また、「活かす」と「生かす」など表記は異なるが同意である単語は「活かす」として統一するよう設定し、同義語として解析した。

C. 結果

C-1. 入学者の選抜方式

2024 年度における国公私立大学入学者の選抜区分数別の入学者を見ると、一般選抜（47.5%）、学校推薦型選抜（35.0%）および総合型選抜（16.1%）による入学者が、全入学者のほとんどを占めることから、それら 3 つの入試方法について詳細を調査した。

なお、試験回数は、同一形態および同一入試科目で 2 日間行われた場合は、のべ 2 回行われたものとし、3 日間行われた場合は、のべ 3 回として集計した。

C-1-1. 総合型選抜

総合型選抜試験は、詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによ

って、入学志願者の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に評価・判定する入試方法である [1]。総合型選抜を導入している大学数と試験回数を表1に示した。国公立大学23大学中5大学(実施率21.7%)でそれぞれ1回/年ずつ行われていた。一方で、私立大学では、120 大学中 103 大学(実施率 85.8%)で、のべ184回行われていた。私立大学では1大学あたり平均 1.8 回/年であり、国公立大学に比べ、総合型選抜試験の回数が多かった。選考要素について見てみると(表 2)、書類および面接の両方を課している大学が多く(国公立大学 80.0%、私立大学 85.9%)、第 1 次選考として書類審査、第2次選考として面接や小論文が課される場合もあれば、段階的な選考は設けず行うケースも見られた。なお、審査書類の種類も各大学で様々であり、願書のほかに、調査書、志望理由書、自己推薦書、活動報告書および学習計画書などが見られた。その他、審査書類として、分野に関連する課題レポートの提出を求める大学や、面接の一環としてプレゼンテーションや口頭試問を課す大学もあった。国公立大学においては、受験生の学力を測るために、大学入試センターが実施する大学入学共通テスト(共通テスト)を課す大学も見られた。

C-1-2. 学校推薦型選抜

学校推薦型選抜は、出身高等学校長の推薦に基づき、調査書を主な資料としつつ、大学教育を受けるために必要な知識・技能、思考力・判断力・表現力等も適切に評価・判定する入試方法である [1]。学校推薦型選抜には、大学の出願条件を満たせば受験できる「公募制」と、大学が指定した高等学校の生徒しか受験できない「指定校制」の 2 つに分かれる。ここでは特に「公募制」の学校推薦型選抜について調査した。

大学によっては試験を2回行う場合もあり、22大学でのべ33回の選抜が行われていた(表3)。私立大学では、総合型選抜と同様に試験回数が多く、120 大学中 102 大学から情報が収集でき、のべ 179 回行われているのが確認できた。1大学あたりでは、平均1.8回/年となり、国公立大学(平均 1.5 回/年)に比べ多かった。選考要素について見てみると(表 4)、総合型推薦と同様に書類および面接の両方を課す大学が多く(国公立大学 97.0%、私立大学 64.8%)、それらに加え小論文、適性検査、基礎学力試験などを課す大学が多く、総合型選抜における選考要素に比べ多岐にわたるものであった。基礎学力試験では、理科(生物、化学)を選考の選択科目として求める大学も見られた。

C-1-3. 一般選抜試験

一般選抜は、学力検査、小論文等を主な資料とし、また、大学・学部等の目的、特色、専門分野等の特性によっては実技検査等を主な資料に加えつつ、調査書、入学志願者本人の記載する資料等を組み合わせて、入学志願者の能力・意欲・適性等を評価・判定する入試方法である [1]。国公立大学と私立大学とで選抜方法に違いが見られたことから、ここでは国公立および私立の別に記載した。

C-1-3-1. 国公立大学

大学入試センターが実施する共通テストと各大学が独自に実施する「個別試験」がある。国公立大学の一般選抜試験では、この共通テストと各大学が実施する個別試験(二次試験)の両方を受験するのが一般的である。二次試験は、一大学で年間1～3回行われ、中でも2回(例:前期および後期)実施している大学が多く、国公立23大学のうち17大学(73.9%)を占めてい

た(表 5)。一大学あたりの試験回数は平均 1.8 回/年であった(表 6)。試験科目について見てみると、共通テストでは、国公立 23 大学すべてで理科(『物理基礎／化学基礎／生物基礎／地学基礎』、『物理』、『化学』、『生物』、『地学』から選択)が必須となっていた(表7)。二次試験と言われる個別試験では、共通テストと異なり、また前期・後期などの試験期日でも異なるが、理科の科目を必須とする大学、必須としない大学があった。必須とする場合は、化学(化学基礎を含む)または生物(生物基礎を含む)を課す大学が多かった。共通テストおよび個別試験の両方で理科の科目を必須とする大学は 10 大学(試験回数のべ 13 回)あり、共通テストでは理科が必須であるものの、個別試験では理科を必要としない大学が 19 大学(試験回数のべ 28 回)と多かった。

C-1-3-2. 私立大学

私立大学における一般選抜試験は、大学独自の問題で行う方式(一般個別方式)と共通テストを利用する方式(共通テスト利用方式)が主な受験方法であった。さらに、共通テスト利用方式では、共通テストの得点のみで合否を判定する場合と、大学独自の問題とを併用する場合があった。

大学独自の問題で行う一般個別方式は、118 大学でのべ 392 回の試験が行われていた(表 6)。一大学あたりの試験回数は平均 3.3 回/年で、国公立大学の 1.8 回/年に比べて多く行われていることが確認された。一般個別方式の試験回数の詳細を表 8 に示した。一大学で1～10 回/年と国公立大学に比べ回数が様々であり、2～4 回/年の頻度で実施している大学が多く、今回情報が得られた私立大学 118 大学のうち 92 大学と多くを占めていた。共通テスト利用方式では、112 大学から情報が得られ、のべ 370 回の試験が行われ、一大学あたりの試験回数は、平均3.3 回/年と一般個別方式と同程度で、国公立大学に比べて多かった(表 9)。共通テスト利用方式の試験回数の詳細を表 10 に示した。一大学で1～9 回/年と一般個別方式と同様に多かった。一般個別方式と同じように 2～4 回/年行われている大学が多く、112 大学のうち 94 大学とほとんどを占めていた。

一般個別方式における理科の選択を表 11 に示した。教科ごとに複数科目がある場合(例:理科には科目として化学、生物などがある)、化学および生物の 2 科目を選択した場合の受験教科数は 1 教科となり、理科の科目のいずれかおよび理科の科目以外を選択した場合の受験教科数は 2 教科とした。同一大学で理科必須と理科選択の両方の試験形態がある場合は、それぞれを 1 回の試験回数として集計した。

一般個別方式は、のべ 392 回の試験が行われていたが、中でも 2 教科型および 3 教科型の試験回数がそれぞれ 169 回(43.1%)および 89 回(22.7%)と多くを占めていた。理科の選択について見ると、のべ 392 回中で、理科を選択科目とする試験が 209 回(53.3%)を占め、理科を必須とする試験は 83 回(21.1%)に留まっていた。2 教科型および 3 教科型における教科選択について見ると、2 教科型で理科を必須とする試験は 35 回(20.7%)、3 教科型で理科を必須とする試験は 40 回(44.9%)であった。2 教科型に比べ 3 教科型で理科を必須とする割合が多く、いずれの教科型でも理科を選択科目とする割合が大きかった。

共通テスト利用方式における理科の選択を表 12 に示した。ここでも同一大学で理科必須と理科選択の両方の試験形態がある場合は、それぞれを 1 回の試験回数として集計した。共通

テスト利用方式についても、実施校 112 大学でのべ 370 回の試験が行われ、2 科目型および 3 科目型の試験回数は、それぞれ 176 回(47.5%)および 125 回(33.7%)と多く、全体の約 81%を占めていた。理科の選択について見ると、2 科目型では、理科を必須とする試験は 176 回のうち 33 回(18.8%)、3 科目型では 125 回のうち 50 回(40.0%)であり、2 科目型に比べ 3 科目型で理科を必須とする回数が多かった。2 または 3 科目型いずれでも理科を選択とする割合が大きく、特に 2 科目型では 176 回中で 143 回(81.3%)と大部分を占めていた。

C-2. テキストマイニングを用いたアドミッションポリシーの解析

名詞、動詞、形容詞として使用されている単語の出現頻度を解析し、各単語の出現回数が多い順に表 13 に示した。この出現頻度の解析結果に基づいて、出現回数の多い順にワードクラウドを作成した(図 1)。名詞として抽出された単語総数は 892、動詞は 174、形容詞は 25 であった。名詞として最も用いられていた単語は「健康(212)」であり、次いで「基礎(199)」、「食(154)」、「知識(153)」の順であった(括弧内の数字はそれぞれの単語の出現回数を示す)。科目名として最も多く用いられていたのは「化学(84)」であり、次いで「生物(74)」であった。その他の科目は、「数学(38)」、「国語(36)」、「英語(36)」であった。また、対人能力を連想させる名詞として、「コミュニケーション(75)」や「人々(70)」、「他者(50)」も抽出された。動詞として最も用いられていた単語は「学ぶ(105)」であり、次いで「考える(53)」、「求める(52)」であった。形容詞としては「強い(60)」、「幅広い(30)」、「高い(25)」の出現回数が多かった。

併せて、文章中に出現する単語の出現パターンが類似する単語を線で結んだ共起ワード図を作成した(図 2)。この解析では、文脈内の単語の関連性を明確化できる。例えば、「話す」、「書く」、「聞く」、「読む」の 4 つの動詞は、いずれも強い関連性があり、管理栄養士養成のアドミッションポリシーというよりも大学としての入学者受け入れの方針が強く表れていた。また、学問体系では、基礎的な学力として「化学」と「生物」の関連性が強く表れており、いずれも技能の習得に繋がる必要な知識であることが示された。加えて、管理栄養士養成大学のアドミッションポリシーとして、多くの大学が「健康」を起点として、強い意欲と感心をもって、医療・介護・福祉を始めとする様々な領域で活躍できる食と栄養のプロフェッショナルである管理栄養士の養成を目指していることがわかった。

D. 考察

本研究では、管理栄養士養成大学を対象とし、国公立・私立の別および入試制度の別に、入学者選抜の実態について、特に、入試科目として理科を課しているかどうかに焦点を当てて調査した。本分担研究者らが知る限り、こうした先行研究はない。本研究成果は、今後の管理栄養士養成大学における基礎学力向上に向けて貴重な資料になると考えられた。

本研究を通じ、入学者の選抜方式を分類すると一般選抜、総合型選抜および学校推薦型選抜の 3 つがあり、従来の学力試験だけでなく、受験生の多様な能力や思考力を評価するなど、複雑化してきていることが明らかとなった。近年の大きな変化としては、総合型選抜および学校推薦型選抜による入学者の割合が増え、受験の早期化が進んでいることが挙げられる[3]。管理栄養士養成大学においても、その傾向にあり、また、入試形態も多様化していることがこの調

査から明らかとなった。その中で、理科の科目を見てみると、総合型選抜および学校推薦型選抜における選考要素として理科（化学基礎および生物基礎）の基礎学力を課している場合が一部あった。一般選抜においては、国公立大学では、共通テストで理科が必須となっているが、大学独自の問題で行う一般個別方式と共通テスト利用方式が主な受験方法である私立大学では、2 教科型および 3 教科型で理科の科目を課す場合が多く、特に 3 教科型では理科の科目を必須とする試験の割合が高かった。

管理栄養士養成大学として掲げているアドミッションポリシーをテキストマイニング解析したところ、多くの大学が健康社会の実現のために貢献できる管理栄養士養成を目指していることがわかった。理想とする管理栄養士を養成するためには、食や栄養に関する知識を医療分野や教育分野などのそれぞれの専門分野で活かせる能力の涵養が重要であり、そのための基礎学力として、理科の科目である化学と生物の知識の習得が重要となると考えられた。これらの基礎知識を活用し、専門基礎分野や専門分野の内容理解へと繋げ、最終的には技能の熟達へとステップアップさせることが今後の管理栄養士養成において重要となると考えられた。

近年、多くの私立大学では、総合型選抜や学校推薦型選抜などの年内入試での早期で入学者を確保する動きが見られる。令和 7 年度の管理栄養士養成施設大学（私立大学）における各入試方法の募集人員とその割合を表 14 に示した。各大学の入試要項および入試ガイドによると、私立大学 120 大学の募集人員は 9,880 人であった。それに対して、総合型選抜による募集人員は 1,997 人（20.2%）、学校推薦型選抜では 3,343 人（33.8%）と管理栄養士養成施設大学においても総合型選抜と学校推薦型選抜を合わせた年内入試の割合が全体の半数以上を占めていた。

管理栄養士養成課程では、専門基礎分野を始めとして理科の科目に係る基礎学力が求められるが、近年増加傾向にある総合型選抜および学校推薦型選抜では、理科の科目を選考要素として設定していないことが多い。このため、管理栄養士養成大学には理科の科目の基礎学力を習得しない状態で入学する学生が今後増加していく可能性が考えられた。このような状況も踏まえると、管理栄養士養成大学において、入学前・入学後教育で理科の科目を始めとする基礎学力の向上を図っていく必要があると思われた。本分担研究者らが知る限り、こうした先行研究はない。

本研究では、管理栄養士養成大学における、国公立・私立の別および入試制度の別の試験回数、選考要素・理科の選択状況等について集計したが、選考要素・理科の選択状況の区分別の受験者数、合格者数および入学者数等については、十分に把握できず、集計できなかった。この点が本研究の主な限界である。

E. 結論

管理栄養士養成大学が掲げるアドミッションポリシーのテキストマイニング解析から、基礎学力として化学や生物の知識の習得が重要であると養成施設が認識していることが示され、それに基づく入学者選抜が一般選抜の必須科目から確認できた。

一方で、近年少子化による 18 歳人口の減少により、大学入学者数が募集定員を下回る状況が報告され [2)]、管理栄養士養成大学においても国公立大学を除く、多くの大学では入学者数が募集定員を下回る状況を回避するため、総合型選抜や学校推薦型選抜などの年内入試で

早期に入学予定者を確保する動きが見られるようになってきた。現在までのところ一般選抜で理科の科目を課す大学が多いことを考えると、理科の科目を選考要素とせずに入学する学生が今後増加していく可能性が考えられる。したがって、早期合格者が入学するまでの期間は、学習意欲を維持し、入学後に必要な学力を習得するためにも重要な期間として捉えることもでき、専門性を意識した理科の科目の入学前教育の重要性が高まるものと考えられた。

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

G. 知的所有権の出願・登録状況

（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

H. 参考文献

1)文部科学省　令和７年度大学入学者選抜実施要項（令和６年６月５日）
https://www.mext.go.jp/content/20240605-mxt_daigakuc02-000010813-3.pdf（令和７年３月 14 日閲覧）

2)文部科学省　令和６年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要（令和６年 11 月 27 日）
https://www.mext.go.jp/content/20241120-mxt_daigakuc02-000038880_1.pdf　（令和７年３月 14 日閲覧）

3)文部科学省　大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する調査研究（令和６年２月）
https://www.mext.go.jp/content/20240319-mxt_daigakuc01-000034622_1.pdf　（令和７年３月 14 日閲覧）

表 1　総合型選抜を導入している大学数と総合型選抜の試験回数

大学区分	大学数（校）	試験回数（回）	1大学あたりの試験回数（回）
国公立大学	5	5	1.0
私立大学	103	184	1.8

表 2　総合型選抜における選考要素とその組合せ

選考要素	国公立大学（校）	私立大学（校）
書類*	0	15
他	0	2
書類・面接	0	32
書類・他	0	22
面接・小論文	0	3
面接・他	0	4
書類・面接・小論文	1	28
書類・面接・他	3	62
書類・小論文・他	1	0
書類・面接・小論文・他	0	14
情報なし	0	2

*願書、調査書、志望理由書、自己推薦書、活動報告書、学習計画書など

表 3　学校推薦型選抜を導入している大学数と学校推薦型総合型選抜の試験回数

大学区分	大学数（校）	試験回数（回）	1大学あたりの試験回数（回）
国公立大学	22	33	1.5
私立大学	102	179	1.8

表 4　学校推薦型選抜における選考要素とその組合せ

選考要素	国公立大学（校）	私立大学（校）
書類*	0	7
適性	0	4
基礎	0	2
書類・面接	13	22
書類・小論文	0	3
書類・適正	0	5
書類・基礎	0	12
書類・理科	0	14
書類・他	0	2
面接・小論文	1	3
適性・他	0	1
書類・面接・小論文	13	50
書類・面接・適性	2	5
書類・面接・基礎	2	21
書類・面接・理科	1	2
書類・面接・他	0	2
書類・面接・提出	0	1
書類・適正・他	0	2
書類・基礎・他	0	7
書類・理科・他	0	1
書類・面接・小論文・基礎	0	2
書類・面接・理科・基礎	0	1
書類・面接・小論文・他	1	3
書類・面接・適正・他	0	4
書類・面接・基礎・他	0	1
書類・面接・小論文・基礎・他	0	2

*願書、調査書、志望理由書、自己推薦書、活動報告書、学習計画書など

表 5　国公立大学における一般選抜試験の試験回数

試験回数（回）	大学数（校）
1	5
2	17
3	1

表 6　国公立私立大学における一般選抜試験の一大学あたりの試験回数

大学区分	大学数（校）	試験回数（回）	1大学あたりの試験回数（回）
国公立大学	23	42	1.8
私立大学	118	392	3.3

表 7　国公立大学における一般選抜試験での理科の選択

試験区分	理科必修		理科選択		理科なし	
	大学数（校）	試験回数（回）	大学数（校）	試験回数（回）	大学数（校）	試験回数（回）
共通テスト	23	42	0	0	0	0
個別試験	10	13	1	1	19	28

表 8　私立大学における一般選抜試験（一般個別方式）の試験回数

試験回数（回）*	大学数（校）	のべ回数（回）**
1	7	7
2	28	56
3	48	144
4	16	64
5	8	40
6	4	24
7	2	14
8	3	24
9	1	9
10	1	10
合　計	118	392

*1大学で1年間に行われた試験の回数
**試験回数×大学数

表 9　私立大学における一般選抜試験（共通テスト利用方式）の一大学あたりの試験回数

大学区分	大学数（校）	試験回数（回）	1大学あたりの試験回数（回）
私立大学	112	370	3.3

表 10　私立大学における一般選抜試験（共通テスト利用方式）の試験回数

試験回数（回）*	大学数（校）	のべ回数（回）**
1	3	3
2	33	66
3	38	114
4	23	92
5	6	30
6	3	18
7	3	21
8	1	8
9	2	18
10	0	0
合　計	112	370

*1大学で1年間に行われた試験の回数
**試験回数×大学数

表 11　私立大学における一般選抜（一般個別方式）での理科の選択

受験教科数	理科必須		理科選択		理科なし		合　計
	大学数	試験回数	大学数	試験回数	大学数	試験回数	試験回数**
なし	0 校 (0)	0 回 (0)	0 校 (0)	0 回 (0)	19 校 (100)	22 回 (100)	22 回
0～1教科	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (100)	1 (100)	1
1教科	6 (18.8)	7 (16.7)	10 (31.3)	11 (26.2)	16 (50.0)	24 (57.1)	42
1～2教科＊	1 (4.0)	1 (2.1)	21 (84.0)	42 (87.5)	3 (12.0)	5 (10.4)	48
2教科	24 (22.4)	35 (20.7)	55 (51.4)	94 (55.6)	28 (26.2)	40 (23.7)	169
2～3教科	0 (0)	0 (0)	12 (92.3)	20 (95.2)	1 (7.7)	1 (4.8)	21
3教科	21 (42.0)	40 (44.9)	25 (50.0)	42 (47.2)	4 (8.0)	7 (7.9)	89
合　計	52	83	123	209	72	100	392

(　) 内は、それぞれの受験教科数の大学数および試験回数の合計値に対する割合（%）を示す。
＊ 教科ごとに複数科目がある場合（例: 理科には科目として化学、生物などがある）、化学および生物の2科目を選択した場合の受験教科数は1教科となる。理科のいずれかおよび理科以外を選択した場合の受験教科数は2教科となる。
＊＊ 受験教科数ごとの試験回数の合計を示す。
注: 同一大学で理科必須と理科選択の両方がある場合は、それぞれを1回の試験回数として集計した。

表 12　私立大学における一般選抜（共通テスト利用方式）での理科の選択

受験科目数	理科必須		理科選択		理科なし		合　計
	大学数	試験回数	大学数	試験回数	大学数	試験回数	試験回数*
1科目	4 校 (14.3)	6 回 (15.4)	20 校 (71.4)	29 回 (74.4)	4 校 (14.3)	4 回 (10.3)	39 回
2科目	17 (21.3)	33 (18.8)	63 (78.8)	143 (81.3)	0 (0)	0 (0)	176
3科目	29 (42.0)	50 (40.0)	40 (58.0)	75 (60.0)	0 (0)	0 (0)	125
4科目	10 (71.4)	13 (72.2)	4 (28.6)	5 (27.8)	0 (0)	0 (0)	18
5科目	7 (70.0)	8 (66.7)	3 (30.0)	4 (33.3)	0 (0)	0 (0)	12
合　計	67	110	130	256	4	4	370

(　) 内は、それぞれの受験科目数の大学数および試験回数の合計値に対する割合（%）を示す。
＊ 受験科目数ごとの試験回数の合計を示す。
注: 同一大学で理科必須と理科選択の両方がある場合は、それぞれを1回の試験回数として集計した。

表 13　アドミッションポリシー内で用いられている単語（名詞、動詞、形容詞）の出現回数

順位	名詞	出現回数	動詞	出現回数	形容詞	出現回数
1	健康	212	学ぶ	105	強い	60
2	基礎	199	考える	53	幅広い	30
3	食	154	求める	52	高い	25
4	知識	153	取り組む	48	深い	13
5	栄養	144	目指す	36	わかりやすい	9
6	意欲	141	伝える	21	望ましい	8
7	管理栄養士	109	活かす	20	広い	7
8	関心	109	基づく	17	粘り強い	5
9	学力	97	備える	17	おいしい	3
10	社会	97	関わる	14	ふさわしい	2
11	貢献	87	望む	13	分かりやすい	2
12	理解	86	続ける	12	正しい	2
13	化学	84	向ける	11	明るい	2
14	必要	81	読む	11	優しい	2
15	コミュニケーション	75	書く	10	忍耐強い	1
16	生物	74	聞く	10	あたらしい	1
17	分野	71	まとめる	9	あたたかい	1
18	人々	70	話す	9	厚い	1
19	能力	67	努める	8	やさしい	1
20	興味	59	担う	8	温かい	1
21	学習	54	高める	8	熱い	1
22	他者	50	惜しむ	7	大きい	1
23	科学	50	図る	7	新しい	1
24	課題	50	深める	7	多い	1
25	栄養学	47	思う	7	良い	1

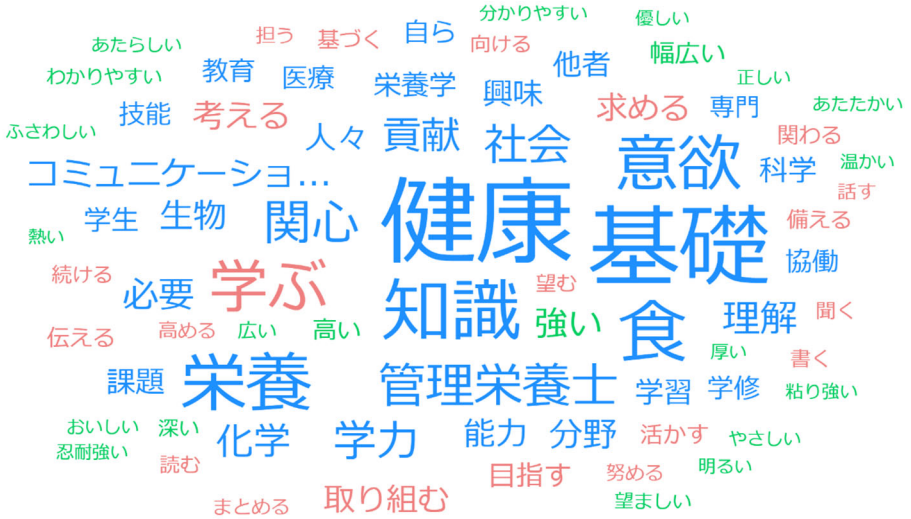

図 1　単語の出現頻度に基づくワードクラウド

出現頻度の高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで単語を図示した。

単語の色は品詞の種類で異なり、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞をそれぞれ表している。

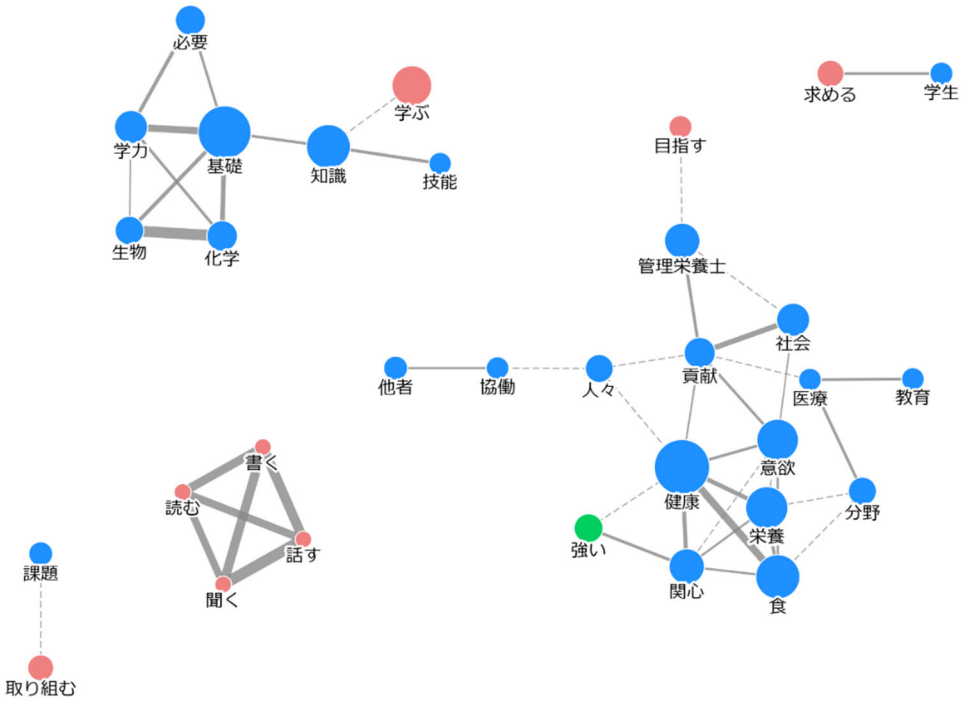

図 2　共起ワード図

文章中に出現する単語の出現パターンが類似したものを線で結んだ図。出現数が多い単語ほど大きく、また共起の程度は強い方から順に　太い実線＞細い実線＞破線で描画した。

表 14　令和 7 年度管理栄養士養成大学(私立大学)における各入試方法の募集人員とその割合

入試方法	募集人員（人）	割合（%）
総合型選抜	1,997	20.2
学校推薦型選抜	3,343	33.8
一般選抜（個別方式）	3,050	30.9
一般選抜（共通テスト利用方式）	936	9.5
その他＊	554	5.6
合　計	9,880	100.0

＊特別選抜（社会人入試、帰国子女入試など）、指定校推薦入試など